金の華
～前編～

雨泉洋悠

金の華～前編～

雨泉　洋悠

　初夏、空から振る陽射しと、木々の緑は徐々にその濃さを増し、私達の日々を照らす。

私に寄り添い、オレンジの陽射しに透ける、金の華。
　聞き慣れた、流れるような鈴の音と共に、春の訪れに、心躍らせる。
　この空間に満ちる、光の帯。ひととき奏で終えた、月乃さんの髪を、柔らかに揺らす。
　いつもと変わらずに、馨るその髪に、私はそっと、手を触れる。
「なっ、なに」
　月乃さんは驚いた様子で、話を途中で止め、私の手をそのままに、こちらを見る。
　焦りの浮かぶ、その表情もまた、ここ最近で、見慣れた顔。
「月乃さんの髪は、綺麗ですよね。この時間の陽の光を浴びると、不思議な薄茶色になります」
　月乃さんの髪をくるくると、陽に晒しながら、指と指の間を流し通す。月乃さんの香りが、仄かに増す。
　私の手に伝わる感触は、ぬいぐるみのように、ふわふわしている。
「あ、ありがとう。お母さま譲りのこの色は私も大好きなの。でも、私は陽子の髪も大好きだよ。いつだって艶やかな、月蝕の色とシルクの手触り」
　そう言いながら、先程からずっと触れたままの私の髪を、再び撫で梳かす。
「ありがとうございます。私も自分の髪はお母さんま譲りでお気に入りです。それでも、月乃さんみたいな綺麗な色には憧れます。今度染めてみましょうか…」
　もう片方の手で、自分の髪に触れてみる。
「ダメ！陽子の髪はこの色じゃないとヤダ！」
　そう言って、月乃さんは私の髪を両手で、労るように包み込む。月乃さんの両手の柔らかさが、嬉しい。
「ですが、月乃さんのような光に透ける色は、女の子なら誰でも憧れてしまうものですよ」
　私も月乃さんと同じように、両手でその綿菓子のような感触を包み込んで、自分の頬に寄せてみる。
　頬を擽る、綿菓子のような感触と、花の香り。
「う、で、でも、私は陽子の髪の色はそのままが良いし、そりゃ、私の色を好きになってくれるのは嬉しいけど……」
　月乃さんは、その頬の色を、更に朱色に染めながら、消え入るように呟く。
　月乃さんらしいその様子に、私は思わず頬が緩む。
「解りました、では色は絶対に変えません。でも、そろそろ毛先が乱れてきたので、揃えて貰ったりとかしたいところですね」

　私は月乃さんから手を離し、自分の髪の毛先に、指を絡ませる。ふわふわから、いつもの手触り。
「陽子はいつも、どこで髪を切って貰っているの？」
　月乃さんは、少し残念そうな表情を浮かべながら聞いてくる。
「いつもは、と言うか生まれてからずっとですね。お母さんに切って貰っています。ただ、長さは少し短くしたことがあるぐらいです。今回も少しだけ短くしてもらいましょうか……」
　うちのお母さんは、生まれた時からずっと、私の髪を切ってくれている。
　そう言えば、私の髪を扱う時のお母さんは、月乃さんと、よく似ているような気がする。
「そっか……じゃあ悪いかな……」
　月乃さんのつぶやきが、耳に届く。
「どうしました？」
　私はその先を促す。
　月乃さんは私の髪から、手を離す。
「うん、私の知り合いの人がやっている美容院があるんだけど、そこに陽子を一度連れて行きたいなあと思って」
　月乃さんは、そう言って再び頬を染める。その申し出は、少し意外だけれども、同時に心惹かれるものだった。
「そうなんですか、そのお店ってどこにあるんですか？」
　私は惹かれた心に従って、問い掛ける。
「渋谷、女子高生の聖地の渋谷」
　月乃さんは、微笑んで告げる。私は俄然、興味が湧いてくる。
「渋谷ですか……実は私行ったこと無いのですが、私達にとっては聖地だとは知らなかったです。行ってみたいですね」
　そう言って、私も微笑み返す。
「じゃ、じゃあ行ってみる？今週末にでも」
　月乃さんが、更に笑顔で言う
「はい、そうですね、そのお店で髪を切って貰いたいかなと思います」
　月乃さんは少しだけ表情を曇らせる。
「でも、陽子のお母さまに申し訳ないような……大丈夫？」
　月乃さんは不安そうに、上目遣いで尋ねて来る。
　なので、私は微笑みで返す。
「大丈夫です、お母さんなら多分喜んで送り出してくれる筈です」
　月乃さんは満面の笑顔で、両手を振り上げながら答える。
「本当に？やった！じゃあ、今週末は二人でお出かけだね！」
　先程よりも濃さを増した、オレンジ色の光の中で、嬉しそうにはしゃいでいる月乃さんを、見つめる。
　今週末は、何よりも楽しい一日を月乃さんと過ごすことが出来そうだ。

次回

後編

金の華～前編～

http://p.booklog.jp/book/85371

著者：雨泉洋悠
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/dairain/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/85371

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/85371

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ